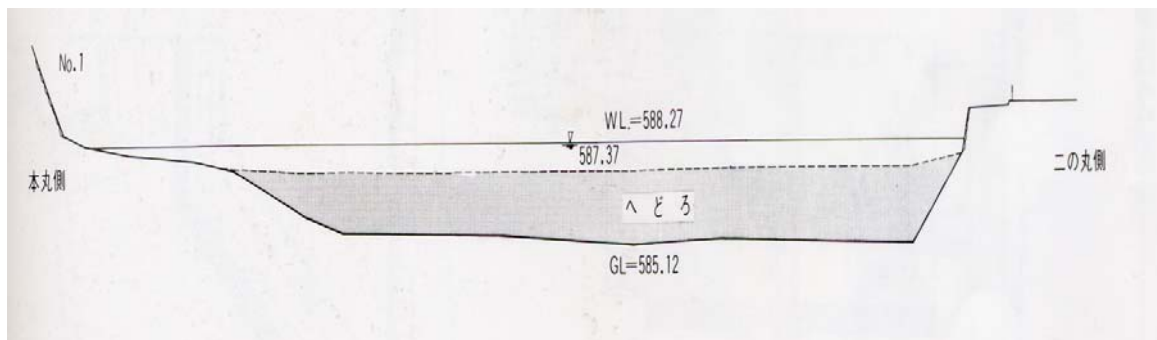


## コラム 松本城の堀の浚渫

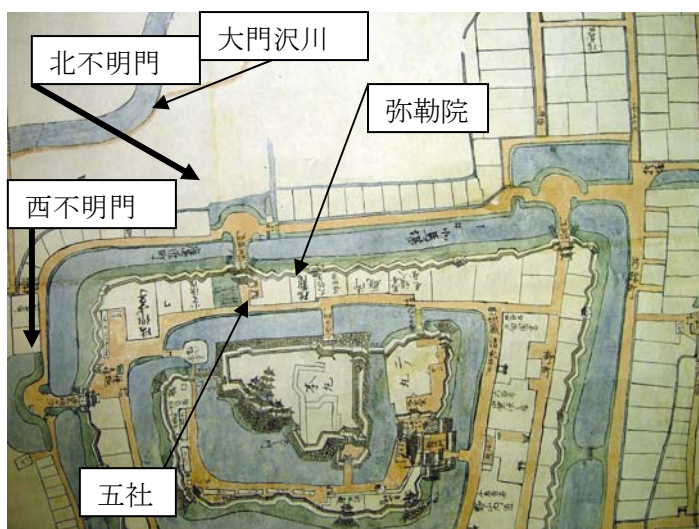
松本城の堀は片薬研<sup>かたやげん</sup>という形式で掘られている。

二の丸側から急に深くなり本丸側に向かって段々浅くなっていく形式である。堀の底には泥が毎年、堆積する。この堀の泥をどのように取り除いて来たかについて述べてみたい。



### ①弘化2年(1845)総(惣)と北西外堀の浚渫

2月上旬より、4月12日まで、人夫は一日300人ずつ、岡田・山辺・庄内・高出・島立・長尾・保高・成相の8組にわり当てられた。女鳥羽川の水を稲倉より大門沢へ切りおとし、北馬場より外堀へ引き入れ、北不明門より弥勒院前を掘り割り、内堀へ入れた。まず地蔵清水より浚い始め、本丸、土井尻に及び西堀に落として浚い、その泥をことごとく犀川<sup>さいがわ</sup>に流した。にごった水は新潟の海におよび、飲料水を汚し、漁業を妨げ、下流の迷惑は甚だしかった。(「昭和8年刊 松本市史上」より)



領主の農民への配慮であった。

2月上旬は、まだ松本では薄氷がはり、水は冷たかったと思われる。冬の渇水期で堀の水は少なめであったのではないだろうか。泥流しのために女鳥羽川の水を上流<sup>しなぐら</sup>稲倉から取り入れ大門沢川にいれ大門沢から北馬場の北総堀に引水し北不明門<sup>あかずのもん</sup>から水路を掘り<sup>みろくいん</sup>弥勒院前から外堀に落とし、泥を流す水量を確保している。農閑期に農民に夫役<sup>ぶやく</sup>を割り当てるのは

では、動員された農民はどのように堀の浚渫しゅんせつに当たったのか、庄内組大庄屋折井家文書  
[弘化二年二月廿二日より 御堀浚日記おほりさらい]（松本市文書館写真資料）よりみてみたい。

弘化2年2月22日が初日で6組へ毎日250人の人足を出すように達しが回っていた。  
この所は旧松本市史と相違するところである。

藩からは奉行や代官・郷目付けが巡回した。現場には御手代1人と同心3人が出張おてだいてきていた。大庄屋は一人ずつ交代しめつやくで出役した。2月25日は庄内組へ250人が割り当てられている。250人を庄内組各村々に次のように割り付けている。庄内村80人・蟻ヶ崎村24人・白板村30人・宮淵村23人・渚村28人・征矢野村14人・小嶋村25人・桐原分きりはらぶん16人 計250人である。

人足達へは庄屋を通じて「堀を浚う場合、身分の高い方々のお住まいの場所に近い所もあるので、みだりがましい言動がないようにすること」とその場所がどこかということが申し渡されていた。

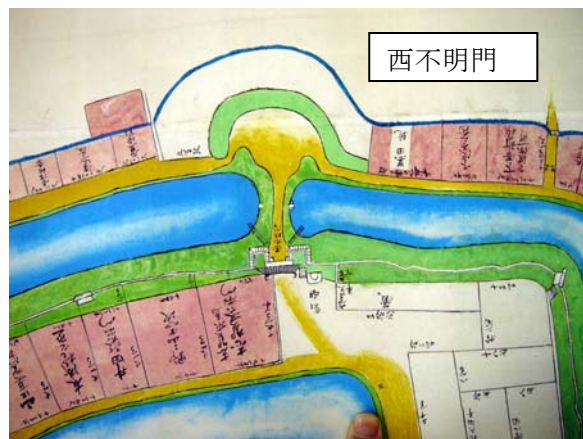
作業は日の出に皆が揃い、午前8時に開始、終了は日の入り。休日はない。雨天でも行なった。作業開始は太鼓の合図。休憩と引き上げは半鐘で知らされた。村から松本城の西不明門外にしあかずのもんに集結し、銘々胸に札を付けて村役人に連れられて作業場所に向かった。休憩は午前10時と午後3時の2回。作業終了後も西不明門外に集まり帰村した。休憩場所は西不明門糶蔵前の木小屋があたえられた。

作業内容は全ての泥を流すことであった。しかし、泥が堅い所は泥の掘り揚げが行われた。

②文化2年（1805）東と南の外堀を浚渫した。

③慶応元年（1864）南総堀浚渫

11月24日より11月1日までの間、同年五月17日の女鳥羽川氾濫で埋まった南総堀を庄内組・岡田組・山家組・高出組・島立組から毎日300人の人足を出して、堀の中に入り込んだ土砂を縄手通りへ掘り揚げた。そのため地形は6尺程（約180cm）高くなったといわれている。（②③は旧松本市史上による）



さて、明治以後、大々的に松本城の堀の泥の除去が行われたとする記録は見当たらない。